

はじめに

心理療法の想像力とは何だろうか。私たちは他人の心の傷つきや痛みを理解しようとするとき、自分の想像力を用いてその作業をおこなう。形がなく直接触れることのできない他人の心には、治療者自身の心の動きを通してしか到達できない。

心理療法場面で治療者の心を刺激するのは、患者の心の動きである。患者の心を直接知ることにはできないので、これを間接的にわかろうと努める。患者の心をうかがう手段として、言葉や夢や箱庭を利用する。患者にこのような自己表現を求めることによって、治療者自身の想像活動を喚起するのである。患者の言葉や夢は無意識の部分を含んでおり、治療者にはそれらを解釈する能力が必要である。このため分析家になるトレーニングとして、例えば夢解釈のセミナーに出席することが義務づけられている。

言葉や夢や子どものプレイや箱庭表現についての理解力がいかに上達しても、患者との関係性のもとでの、治療者自身の心を直接介する理解がなされない限り、患者理解はしばしば的外れなものとなる。治療者の心を通して患者をわかるために、私たちは訓練としてスーパーヴィジョンや教育分析を受ける。しかし前者はスーパーヴィザーの心を一旦通過しなければならぬので、患者理解が間接的で薄められたものになる。後者は個々の患者を、個別的にわかろうとするものではない。

このように見てくると結局、言葉や夢や子どものプレイの内容や箱庭表現を通して患者の想像活動をとらえることに劣らず、治療者自身の想像活動を直接的に把握する意義を強調しなければならなくなる。患者のみならず治療者の想像活動に注目することによって、両者が関係性のもとでどのような心理を生きているかということがわかる。治療者と患者との間で、両者の想像力がいかに働いているかという対応関係を検討していくことが、心理療法を進める上できわめて大切な作業である。治療者の想像力の活動は自身の夢体験や箱庭表現を通して知ることができるが、何より必要なことは、面接中に治療者の心に自然発生的に生じる想像活動に対して心を開き、自分がそれに意識的に関与し続けることである。

私はユング派の分析を職業としている。したがって、批判的に取り扱うことを前提としつつも、本書にはユングの分析心理学の考えが根底にある。学派のドグマの影響をなるべく受けないように心掛けながら、次の点に力を注いだ。それはユングによる錬金術研究を中心に、彼自身が心理療法の実際との関連をほとんど述べていない領域と、面接場面とを架橋することである。錬金術は西洋中世の、すでに今日では姿を消した文化である。欧米の分析心理学者にも、錬金術を臨床と結びつけようとする人は多くない。分析心理学の心理療法的容器や中間領域の考えが、錬金術の心理学的研究に由来することを、本書で明らかにしようとして試みた。

心理療法的容器に対応する錬金術的な容器は、錬金術師と助手との間にそのための空間が確保されなければ存在できない。術師と助手の両者は、二人の関係性のもとで各自の想像力を用いて、容

器の内容物の変容過程を促進する。錬金術的容器の置かれる場が錬金術師と助手との中間領域であり、心理療法的容器は治療者と患者の間に布置する。

本書の構成は、まず昔話と患者や治療者の夢を取り上げて想像活動の世界に分け入る。続いて面接場面における治療者による、今ここの想像力がいかに治癒促進的に働くかの検討に移る。想像活動が治療者自身の心の癒しにどのように結びつくか、ということについても述べる。程度の差こそあれ、患者ばかりでなく治療者も傷ついている。治療者の癒しと、患者の心の癒しとは同時に生じるのである。

心理療法論を臨床例を挙げることなしに繰り返すことは困難であり、実際から遊離したものであり、なりやすい。本書には、臨床家によるいくつかの事例が登場する。いずれも断片的なものであり、実際の事例と無関係ではないが、個人を特定できる恐れのある部分には削除し変更を加えてある。心理療法という困難な道を治療者とともに歩んだ患者のかたがたに、何よりも敬意と謝意を表したい。

著者

目次

はじめに i

第一章 夢と非日常 1

味喰買い橋 2 非日常の世界 4

第三の態度 7

比喩と象徴 10

夢解釈の方法 13

布置に心を開く 16

第二章 布置の逆転 21

民話「夢占い」 22 夢の解釈 26

さまざまの対極性 29

布置の逆転 32 癒しと限

界 36 逆転移 40

第三章 コスモロジーの視点 44

コスモロジーへの関心 45 神話の世界 48

繰り返されるもの 50

小宇宙の更新 52

昔話のコスモロジー 58 心の宇宙 60

第四章 怒りと心の変容 64

民話と怒り 65 投影の強制力 68

押しつけに対する怒り 71

変容させる力 73

事例	76	変容促進的な怒り	79	怒りの布置	81	分化のための怒り	84
----	----	----------	----	-------	----	----------	----

第五章 身体の覚醒 87

連結するもの	88	身体の目覚め	91	七羽のからす	92	摂食障害と境界例	95	身	
体毀傷と心の癒し	98	身体の強制力	101						

第六章 治療者と患者の間 105

癒しの場	106	サトル・ボディ	108	夢と中間領域	111	中間領域としての身体	113	心	
の癒しが生じるとき	116	心の傷つき	119	癒しの技法と距離の問題	122	器の問題	126		

第七章 心理化 128

心理化とは	129	夢と心理化	131	希望のなさについて	135	神話と癒し	137	超越者	
との関係性	140	抱えること	145	治療者の傷つきと怒りを抱える	148				

第八章 想像力 152

錬金術と想像力	153	想像力と関係性	156	親密さと行動化	158	想像力を用いた結婚	162		
治療者の想像力	165	実体性の体験と黒化	168	治療者の体験	171				

第九章 容器の体験 174

- 容器の体験とは 175 容器の形成 177 錬金術と中間領域 180 容器の破壊 184 分化
を促進する 188 守りの容器 190 想像力と融合状態 193 インセスト・タブー 196

第十章 破壊的なもの 200

- 破壊的なもの 201 向き合うこと 203 容器の強制力 205 絶望ということ 209 その
先にあるもの 212 想像力と元型 215

第十一章 現実を夢として聴く 218

- 夢と現実 219 関係性の表現 221 共有的想像力と補償的想像力 225 関わりを避ける手
段 226 現実を夢として聴く 229 癒しとは何か 233

引用文献 237

旧版あとがき 246

復刻版刊行にあたって／網谷由香利 248

索引 260

心理療法の想像力

第一章 夢と非日常

夢を含む想像力とは何だろうか。心理療法家として夢に関わる仕事を始めてから、三十年近くになる。本章では心理療法場面での夢や想像力との取り組みを背景にしながら、癒しとは何かということを考えてみよう。神話の時代から、国家や個人の生活上の危機に際して、夢に答えを求めることがおこなわれた。夢を利用するという点では、現代の夢を用いた心理療法でも変わらない。

一九五〇年代以降のレム（REM）睡眠研究の発展によって、人間の夢見という現象が神経生理学的に基礎づけられることになった。しかし脳波による夢研究は、心の癒しの道具としては役立たない。そのため本章では、夢の生理学ではなく心理学を考える。心理学的に夢と類似のものとして、同じく想像力の産物である民話を取り上げながら、夢と癒しの問題を検討する。

1 味喰買い橋

睡眠中の精神活動の内容を、覚醒時あるいは覚醒後に想起し、それを言語化したものが夢である。夢を心理療法の道具としてどのように利用できるのか、考えることにしよう。

夢分析を用いる心理療法では、病者が自分の見た夢を面接中に治療者に語り、夢を材料にした対話を通して治療が進められる。夢の場面は日常に近いところばかりでなく、地下の領域や天上の世界、あるいは地の果てや海のなかである。私たちは地上の今ここで生活しているが、何らかの行き詰まりや危機的状态に陥ったとき、肉眼でとらえられる昼間の世界以外の、つまり夢という非日常の領域が重要な意味を持つようになる。

地下や天上のような他界について物語るものは、夢に限らない。詩や小説や音楽、子どもと大人の遊びも、非日常の世界と関係している。しかし何よりも昔話や神話は、他界について直接語る。夢と昔話とは、非日常について物語るという点で共通している。昔話のなかに、夢を主題とするものがある。夢と関係の深い昔話が夢について語るといふことから、昔話は二重の意味で、非日常としての夢を検討するための資料になるだろう。

心理療法場面で、治療者は病者の夢を取り扱う。夢分析技法という言葉が示唆するように、夢の扱い方には、ある種の職業的な技術を要する。しかし技術以前の、あるいは小手先の技術よりも大

切な、治療者の基本的な態度については、民話や神話を通じて学ぶところが大きい。わが国の民話からひとつを取り上げて、この点を考えてみよう。この民話については、その字句を一部修正してある。

味噌買い橋

昔、飛驒の沢山さわやまというところに、長吉という信心ぶかい正直な炭焼がいた。ある夜枕もとに仙人のような老人が現れて、「高山の町へ行つて、味噌買い橋の上に立つていてみよ。大そう良いことを聞くから」と言つたかと思つと、目がさめた。

夢であつたが、長吉はさつそく炭を売りながら高山の町へ出て、味噌買い橋の上に立つていた。まる一日立つていたが、何も良いことは聞けなかつた。二日目も三日目も良いことは聞けなかつた。五日目に、味噌買い橋のほとりの豆腐屋の主人が不思議に思つて、「なぜ毎日そこに立つているのか」とたずねた。

長吉は夢の話をした。豆腐屋の主人は笑い出して、「つまらん夢なんかあてにしなさるな。わしもこの間夢を見たよ。老人が現れて、なんでも乗鞍のふもとの沢山とかいう村に長吉という男がいる。その家のそばの松の木の根元を掘れ、宝物が出ると言うたが、わしは乗鞍の沢山なんていう村はどこにあるか知らないし、よし知つていたとしても、そんなばかげた夢なんか信ずる気にはなれん。悪いことは言わない。お前さんもいいかげんにして、お帰んなさい」と

言った。

それを聞いた長吉は、これこそ夢の話に違いないと、身も心も躍る思いで、お礼もそこそこ
に急いで、飛ぶように村に帰って行つた。帰るなりに松の木の根元を掘ってみると、金銀のお
金やいろいろの宝物がざくざくと出た。

そのお陰で、長吉は長者になつた。村の人びとから福德長者と呼ばれた。^①(岐阜県大野郡)

2 非日常の世界

夢をどのように取り扱つたらよいだろうか。扱い方は、夢だけでなく昔話などさまざまの非日常
世界に向き合うときの共通の課題である。一步自分の心の世界に足を踏み入れると、そこにはもう
非日常の世界が広がっている。

民話「味噌買い橋」が意味するものを考えてみよう。まず気づくことは、長吉と豆腐屋の主人と
の、夢に対する態度の相違である。二人の態度は対極的と言えよう。長吉は夢を正面から受け取る。
おそらくは全く素朴に、この場合には夢内容が日常の現実に一致すると考えたのだろう。長吉は夢
のなかの老人の言葉を真に受けて、わざわざ高山まで旅をし、しかも味噌買い橋の上に五日間も立
ち続ける。

豆腐屋の主人の場合にも、長吉の夢に登場した仙人のような老人と、同一人物が出現したのだら

の物語で、娘は小指を切断することによって、異性との対人関係における中間領域を賦活することができたのではないか。私たちは他者との関係において、関わりを深めていくためには、中間的な領域を必要としている。二人の距離が遠すぎれば、関係は全く成立しない。そうかと言って逆に近すぎれば他者によって脅かされて、関係性は深まらない。心理療法的な対人関係では、治療者と患者とが関係性を深化させることのできる守られた場としての中間領域を仮定することは、必須の作業だろう。

身体が癒しの機能を發揮するためには、心理的な体験としての身体が、どれだけ切実にその人の存在全体を揺り動かすように体験できるか否かにかかっている。「七羽のからす」における娘にとって自身の小指の切断は、それまでガラスの壁で隔てられていた異性との間の乖離を、中間領域としての身体の賦活によって克服するという意味があっただろう。このことは、娘の小指によるガラスの山の開放によって兄たちが人間化し救出されるというストーリーからも、読み取ることができ

5 身体毀傷と心の癒し

患者が底知れぬ空虚感から救われようとして、ナイフや剃刀を用いて自分の手首を傷つけるということに触れた。このような人は極度に切実な体験により、身体としての中間領域を賦活すること

を通して、良い自分と悪い自分、良い対象と悪い対象など、さまざまの心の分裂から生じている空虚感を癒そうと試みている。しかし患者の行動は心理的な体験にならないために、中間領域としての身体は賦活されず、自傷行為は心の癒しにつながらない。そうした自傷行為が癒しを促進しない理由は、行動化されて心理的な体験とならないだけでなく、守られた体験ではないということもあるだろう。

建設的な意味を持つ身体毀傷について考えるために、東南アジアなどにおける原住部族の成年儀礼を取り上げておこう。アフリカや東南アジアにおける成年儀礼には、身体毀傷を伴うことがある。例えば、パプアニューギニアのセピック河中流域コロゴ村における成年儀礼では、背中にワニの体表になぞらえた文様を施す。ワニの癩痕文身いれずみを作るのは、トーテム信仰と結びついているとされている。若者の背中に文様を施すために、儀礼の施行者が新参者の背中に、剃刀でデザインに従って刻みを入れる。剃刀が用いられるようになる以前は竹ナイフが使用されていたが、刻みを入れるときの痛みはより激烈なものである。背中の皮膚にワニの文様のデザインに従って深く刻みを入れた後に、化膿を防ぐために、薬草を混ぜた植物油で、背中全体が洗い流される。このときの痛みは、液体が傷口にしみるので、皮膚を刻むときよりもさらに激しいという。⁵⁾

コロゴ村における成年儀礼の実際については、一九九四年にTV放映された映像を通して観察する機会を得た。十数人の男子青年たちが儀礼を受けていたが、村長の十二歳になる息子がその集団の最年少であった。背中の皮膚を刻むときに涙を流さなかった彼が、傷口を洗うときに見せた涙は

心を打つものがあつた。

須藤健一はこのような身体毀傷について、「重要な人生儀礼のさいに日常生活から一時的に隔離され、特定の場所で施され、身体的苦痛にたいする忍耐とそれを克服する勇気を試すことに基本的意味がある」と述べている。エリアーデは身体毀傷を、儀礼的な死と再生において死を象徴するものとしてとらえた⁷。須藤やエリアーデのような理解は可能であるが、癒しの本質に迫るために、身体の覚醒という視点から検討してみよう。

文化人類学の立場から宇野公一郎は身体について、「一般に、人体は自然と人間、個人と社会が重なりあう特別の領域であり、それらのあいだの諸関係が集約的に表現される場である⁸」という、重要な指摘をおこなっている。こうした宇野の身体に対する見方には、本書における中間領域としての身体という考えと共通のものが含まれている。

コログ村の成年儀礼における身体毀傷には、どのような心理学的意味があるのだろうか。新参者は毀傷による激しい痛みや不安・恐怖の体験を通して、人間を超える超越的なものと出会っているのではないか。身体は高度に覚醒し、人とカミとが会おう場となる。私たちが平凡な日常で経験する身体と比べて、はるかに覚醒水準が高い。新参者は身体をもつとして対象化する余裕はなく、否応なくそれを正面から心理的に体験することを強制される。これは身体を心理化することである。

身体の心理化という点でも、社会的に容認された儀礼の一部であることから、ここで取り上げられた身体毀傷は、境界例患者の手首毀傷とは意味を異にするものである。患者が手首を傷つけるとき、

復刻版刊行にあたって

網谷由香利

本書の著者である織田尚生先生は、二〇〇七年五月十一日にこの世を去られた。先生の死があまりにも突然だったこともあり、織田先生に師事した私たちにとって、その死は受け入れがたく、「織田尚生」という偉大な臨床家を失った喪失感から立ち直るまでに多くの時間を要した。

それでも月日は流れ、先生が逝去されてから今年でちょうど十年になる。この節目の年に先生の名著である『心理療法の想像力』が再び世に出ることになったことは、今日の心理療法界にとって、とても意味あることに思えてならない。

織田先生は、精神科医としての体験をもとに、スイスのユング研究所においてユング派分析家の資格を取得、その後、日本の心理療法家の第一人者として臨床に携わる一方で、後続の心理療法家の育成にも力を注いでこられた。私は幸運にも、織田先生の教えを享受し、スーパーヴィジョンと教育分析を受けることによって、心理療法家としての礎を築かせていただいた。

*

私が織田先生に師事するきっかけは、先生が講師を務める事例検討セミナーに受講生として参加したことだった。私は心理職としてまだ駆け出しで、日々困難なケースとどう向き合えばよいか苦悩していた。そうした中で受講した先生の講義は、その当時の私にとってあまりにも衝撃的だった

織田 尚生 (おだ・たかお)

1939年 高知県に生れる。東洋英和女学院大学人間科学部教授などを歴任。

1974年 鳥取大学大学院医学研究科修了 (医学博士)

1984年 チューリッヒ・ユング研究所分析家資格取得

専攻 精神医学, 臨床心理学, 分析心理学

著書 『ユング心理学の実際』 (誠信書房, 1984年), 『王権の心理学』 (第三文明社, 1990年), 『心の環境健康科学』 (放送大学教育振興会, 1991年), 『深層心理の世界』 (レグルス文庫, 1992年) 『昔話と夢分析』 (創元社, 1993年) 他

訳書 ハーディング『心的エネルギー』 (共訳・人文書院, 1986年), シュワルトン-サラント『境界例と想像力』 (監訳・金剛出版, 1997年) 他

2007年 逝去 (5月11日)

心理療法の想像力

2017年9月15日 初版第1刷印刷

2017年9月20日 初版第1刷発行

著者 織田尚生

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル (〒101-0051)

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／永井佳乃

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1571-8 ©2017 Oda Takao, Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

子どもの精神科医五〇年◎小倉清

著者は、59～67年までの8年間、アメリカで「子どもの精神科医」として働き、帰国後もその経験を生かして子どもの精神医療にたずさわる。人は0歳から傷ついている。自叙伝も兼ねた“いじめ”根絶への提言の書。 本体 2000 円

子どもイメージと心理療法◎網谷由香利

日本神話に支えられた心理療法。クライアントと向き合う治療者の無意識に「子どもイメージ」がよび起こされ、治療者は全身に痛みを感じる。クライアントと治療者の無意識が繋がり驚くべき転回が発現する！ 本体 3800 円

「発達障害」の謎◎玉永公子

知的障害、自閉症、LD、ADHD とは何か ユニークな子どもたちは「発達障害」か？「発達障害」という用語が流行しているが、その内容は正しく理解されていない。今も、一括りに「発達障害」とされている子どもたちの現状を、《事例》と《理論》をふまえて批判する！ 本体 2000 円

心の臨床入門◎川井尚

私たちは、自分の、大切な人の、「こころの言葉」にどこで出会えるのか。心理臨床、医療や保険、子育てや介護など、ふだんに「いのち」を養う現場においても折々に開きとなる一冊。 本体 2000 円

おしゃべり心療回想法◎小林幹児

少年少女時代の楽しかった記憶をよみがえらせ、おしゃべりする——それが認知症の予防となり、その進行を抑制する。若い介護士や、高齢者を抱える家族のためのやさしい実践ガイドブック。 本体 1500 円

精神医学の 57 年◎エイブラム・ホフファー

分子整合医学のもたらす希望 ノーベル化学賞を受賞したボーリング博士とともに分子整合療法を創始。国際的医学誌「分子整合ジャーナル」を創刊し、長く編集長を務めた著者が、現代の精神医学に最適な治療プログラムを考える。(大沢博訳) 本体 1600 円

精神医学史人名辞典◎小俣和一郎

収録数 411 名。精神医学・神経学・臨床心理学とその関連領域(医学・神経学・神経生理学・脳解剖学・小児科学・脳神経外科学)など幅広い領域の歴史に登場する研究者・医療者を系統的に収録した、本邦初の人名辞典。研究者必携の書。 本体 4500 円